

連載

子供に聞かせたい、こんな話

その22

# こころざし高く

## 二十世紀の喜劇王

― チャールズ・チャップリン ―

チャップリンは、二十世紀最高の喜劇王です。チャップリンは、独自の笑いを誘って作品を創り上げる舞台俳優でした。後に自ら脚本を書きおろし、主役を演じると同時に、一人で何役もこなしながら映画監督も務めたことで名声を博しました。

八十八歳で亡くなるまでに、不朽の名作といわれる映画を数多く残しています。みなさんのおじいさんやおばあさんなら、たいてい映画の何本かは観ていると思います。

チャップリンは、一八八九年、イギリスのロンドンの下町に生まれました。お父さんは、舞台芸人でしたが、チャップリンが小さいころ病気で亡くなりました。



寄席の芸人をしていたお母さんは、声が出なくなる病気をわずらい入退院を繰り返してしまいました。やがて生活も苦しくなり、お母さんは舞台で使う大切な衣装などを売り、切り詰めた生活をして、その日をしのいでいくのがやっとという状態でした。だんだん食べる物もなくなり、かたくなつたパンを拾い集めたり、色つやがなくなつた野菜を食つたりする日が続きまして。しだいに、それさえも手に入ることが難しくなってきました。いつ食べ物がないか飢えへの恐怖の中、とつとつお母さんは、重い心の病にかかってしまったのです。

家族は、住む家も無く他人の家の屋根うらで肩を寄せ合う日々が続きました。チャップリンは、食品を扱う雑貨店で働くかたわら、新聞を売ったりガラス拭きや印刷工場、散髪屋さんなどの仕事を九箇所もかけもちしたりしながら、昼夜を問わず額に汗して生活を支えていました。

十歳の誕生日を迎えたころ、芸人になることを決めたチャップリンは、自分の思いを話したところ、お母さんは反対しませんでした。

「学校をやめてまでも芸人になる以上、一流になるんだよ。お父さんやお母さんが果たせなかつた夢も成し遂げておくれ。」

お母さんは、悲しみの涙を浮かべながら、ささやくように言いました。それから一週間後、再び入院したお母さんは、二度と住み慣れた屋根つらに居ることはありませんでした。

チャップリンは、悲しみの涙をこらえながらも「俳優

になりたい」という大きな夢と希望をいだいて、地方公演の一座の門をたたきました。そして、俳優の卵として地方を巡る日々が続きました。

二十歳になったころ、公演先のアメリカで演技のうまさに関係者の目にとまってスカウトされ、映画に出演するようになりました。出演する度に映画にかけられる夢は大きくふくらみ「自分の夢を描けるような映画をつくりたい」という一心から五年後、チャップリンは映画会社をつくつたのです。

脚本を自分で書き、監督をしながら主役を演じて次から次へと映画を制作していきました。どの映画の中にも、これまでチャップリンが生きてきた証がうかがえる場面がたくさん登場します。

後年、チャップリンは、自分の息子に「私が、養護施設にいた時や、お腹をすかして街かどで食べ物をあさっていたときでも、自分は世界一になるんだ、という気持ちは捨てなかつた。そんな苦しいときもその役者になって演じているんだと自分に言い聞かせてきた。」と語っています。

どん底生活をしていても希望と勇気、夢をあきらめなかつたチャップリン。それは、映画に登場する、あのダブダブのボロ服にドタ靴、山高帽にステッキを持つ「ちよびヒゲの放浪紳士」チャップリンの格好にも表れています。

チャップリンの映画の中で、こんな歌が流れてきます。「下を向いちゃいけないよ。… たつた一度の人生じゃないか。雨の日もあるでしょう。でも、いつか陽の当たる日も来るよ。… ためだめ、下を向いちゃいけないよ。どんなに苦しい日があつたとしても、 たつた一度の人生じゃないか… 上を向くんだよきつと陽は昇るさ。」

この歌に込められた気持ちは、次のような映画の場面となつて映し出されています。ステッキを持った放浪紳士が、倒れても倒れても再び、ひよっこひよっこ歩き始めるのです。

このように、チャップリンの映画は、笑いや悲しみを表現しているのです。また、チャップリンの映画には、世の中の風刺(世の中や人物のよくないことを遠回しに批判すること)が込められてもいます。チャップリンのこつとした映画づくりの手法は、今なお多くの人たちの共感を呼んでいるのです。

「出典」ウェブサイトに「チャールズ・チャップリン」

※出典を参考文献として文章を構成しています。

小学校4〜6年生用「こころざし教育副読本」に掲載

お問い合わせ先：教育支援館

☎5246-5921

# 学校・園ボランティア感謝状贈呈式を行いました

教育委員会では、区立幼稚園・保育園・こども園・小学校・中学校においてボランティア活動にご尽力をいただき、功績が特に顕著な方々に対し、感謝状を贈呈しています。

1月18日(水曜日)、区役所において感謝状の贈呈式を開催しました。受表彰者は以下の個人・団体の皆様です。

引き続き、子供たちや学校・園への温かいご支援をお願いいたします。

学校	ボランティアの種類	受表彰者氏名・団体名
上野小学校	サッカー指導	皆川 喜代志さん
東泉小学校	ラジオ体操指導	佐久間 友子さん
大正小学校	学校図書ボランティア	大正小学校図書ボランティアの皆さん
浅草小学校	学校図書ボランティア	浅草小学校図書ボランティアの皆さん
富士小学校	学校地域ボランティア(挨拶運動)	菅間 智子さん
松葉小学校	学校図書ボランティア	時田 薫さん
石浜小学校	学校図書ボランティア	石浜小学校図書ボランティアの皆さん
金竜小学校	学校安全ボランティア	飯田 国雄さん
桜橋中学校	ピアノ調律	板谷 朝行さん
駒形中学校	学校図書ボランティア	松濤 晶子さん



〈感謝状受表彰者と関係者の皆さん〉

●お問い合わせ先：庶務課庶務係 ☎5246-1402

# リレートーク

連載 23



小学校長会 会長  
神田 しげみ  
(上野小学校 校長)

## 子供たちに感動する心を

「AIが仕事を奪う時代がやって来る」と言われています。未来を生きる子供たちにとって、今大切にしたいことは、「本物と出会い、感動すること」「様々な体験をすること」ではないでしょうか。知識や技能はAIに負けても、創造する力は人間のもつ武器であると考えています。子供の頃に感動や体験をいかにたくさん記憶に刻み込むことができるかが、AIを使いこなす時代を生き抜くためには必要なことです。幸い、台東区にはその感動の元となる知的財産が豊富にあります。台東区教育委員会では「学びのキャンパスプランニング」「魅力ある教育活動」「オリンピック・パラリンピック教育」など、本物との出会いや感動を得ることができる事業を行っています。そして、様々な専門家との出会いや環境を生かし、各学校での特色ある教育活動が進められているのです。

本校では、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、「みんなが元気になるマーチを作って上野のよさを発信しよう」という取り組みを2年計画で行ってきました。6年生は東京藝術大学の先生方と一緒に、作詞・作曲し、昨年夏、マーチ「明日へ」が完成しました。歌詞には「鐘の音」「スカイツリー」「五重塔」「鍛えた体」「涙も汗も明日のため」など、町やオリンピックを象徴する言葉があふれています。全校合唱を行ったり金管バンドで演奏したりして長く歌い継いでいきたいと考えています。企業の協力の下、この取り組みを映像化し、ビデオコンテストにも応募しました。これは、オリンピック・パラリンピック教育と台東区の魅力を生かした取り組みの一つです。

実際の社会で活用できる表現力や論理的な思考力、未来を切り拓く創造力の育成には、専門家に触れたり社会に出て体験したりする機会を増やしていくことが大切です。このことは、これからの学校教育に一層求められていくと思います。